

被服費よりみた岡山市近郊世帯における衣生活

——家計担当者の消費意識——

近藤 信子

Nobuko Kondō

目 的

消費の多様化ということが、しばしば指摘される。人によって衣生活や食生活、住生活における、それぞれのニーズに対する評価は異なるもので、生活の多様化といった時は、この各ニーズの評価に関するものであることが多い。衣生活におけるニーズについてみると、今日の社会では、衣服の選択基準が、「寒さを防ぐ」という機能よりも、「ファッション性」を重んずる傾向になってきていることは、一般に認めるところである。

この傾向を岡山市における全世帯ならびに勤労者世帯の被服費についてみると、絶対額（昭和50年 14,277円、昭和59年 20,716円）は年次を追って逡増傾向にはあるが、各世帯の消費支出に占める被服費の比率（昭和50年 8.9%、昭和59年 7.4%）は、むしろ逡減傾向を示している。被服に割り当てられる費用は、所得の大きさや衣生活の在り方によって変化するものであるならば、この現象は家庭内の被服類の充実を意味するものであり、ひいては家族全員が衣生活の豊かさを認識していることになる。実態はどうであろうか。

また、消費の主体が家計であるならば、各世帯の家計担当者の消費意識が、衣生活に何らかの影響をおよぼしはしないだろうか。そこで今回、家計担当者の消費意識を調べることにより、家庭内の衣生活の実態を把握することを研究目的とした。

方 法

昭和60年6月上旬～7月中旬にかけて、岡山市・倉敷市を中心に岡山県南地域における一般ならびに農家の家計担当者を対象に、衣料消費の実態に関するアンケート調査を実施した。任意に選択した510世帯に質問紙を配布し、留置法により回答を求めた。その結果、有効回答世帯数は403世帯であった。

結果および考察

1 調査対象者の属性

今回の調査対象である家計担当者は、96.9%（無答14名を除く）が女性である。その家族構成は表1に示すとおりである。調査対象者の職業の有無別、年齢層別構成は表2に示す。30歳未満を10・20代、30～39歳を30代、40～49歳を40代、50歳以上を50・60代とする。調査にあたって、対象者の年齢がかた

よらないよう留意したつもりであるが、今回の調査対象には10代、50代、60代の年齢層が少ないため、10・20代、50・60代を一つとしてまとめた。

家計担当者の年齢層、職業の有無は、その衣生活の在り方や消費意識に大きく影響するものである。他にも無視できない要因が考えられるが、今回は主に職業の有無別に集計し、設問内容によっては年齢層別にも集計し、衣生活の概容把握を試みた。

2 世帯内衣料消費状況と被服費の増減

世帯あたりで最も被服費の割合の大きい者について調べ、その消費状況が、被服費割合に対する家計担当者の考えにおよぼす影響について調べた。表3に示すとおりである。

これによると、夫が衣料最多消費者である世帯の大多数が「当分これでよい」としており、77.4%もの高率となっている。次いで子供、家計担当者の順になる

のに対し、「さらに切り詰める必要がある」とするのは、家計担当者、子供、夫と逆の順となる。被服費を切り詰めるならば、夫や子供のものではなく自分の衣料にかかる費用からとの考えがみられるが、集計結果に統計的有意差は認められない。

また、家計担当者に対する衣料消費割合が最も大きいということについて推察すると、専業主婦をはじめ婦人の行動範囲が広がり、それに伴って衣料消費割合の増加をきたしたと解釈できないだろうか。

表1. 調査対象者の家族構成

実数(%)

平均世帯人員	子 供		祖 父 母	
3.66人	有(同居)	301 (74.7)	同 居	66 (16.4)
	無(非同居)	88 (21.8)	非 同 居	323 (80.1)
	無 答	14 (3.5)	無 答	14 (3.5)

表2. 家計担当者の年齢層別構成と職業の有無

実数(%)

年齢 職業	10・20代	30 代	40 代	50・60代	N. A.	計
有 職	49 (20.4)	80 (33.3)	80 (33.3)	22 (9.2)	9 (3.8)	240 (100.0)
無 職	40 (28.4)	43 (30.5)	34 (24.1)	22 (15.6)	2 (1.4)	141 (100.0)
N. A.	5 (22.7)	2 (9.1)	9 (40.9)	6 (27.3)	0 (0.0)	22 (100.0)
計	94 (23.3)	125 (31.0)	123 (30.5)	50 (12.4)	11 (2.7)	403 (100.0)

表3. 衣料最多消費者と被服費の増減

〔設問〕一カ月平均の被服費についてのお考えを次の中から一つ選んで下さい。 実数(%)

被服費の増減 衣料最多消費者	選 択 肢			N. A.	計
	①	②	③		
家 計 担 当 者	42 (25.1)	10 (6.0)	112 (67.1)	3 (1.8)	167 (100.0)
夫	11 (13.1)	6 (7.1)	65 (77.4)	2 (2.4)	84 (100.0)
子 供	21 (19.8)	7 (6.6)	76 (71.7)	2 (1.9)	106 (100.0)
そ の 他 の 家 族	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
N. A.	12 (26.7)	3 (6.7)	30 (66.7)	0 (0.0)	45 (100.0)
計	87 (21.6)	26 (6.5)	283 (70.2)	7 (1.7)	403 (100.0)

〔選択肢〕 ①さらに切り詰める必要があると思っている。 χ^2 検定：有意差なし
 ②さらに増やす必要があると思っている。
 ③当分これでよい。

3 家計担当者の消費の在り方と家族の衣生活

(1) 家族の衣生活への影響

家計担当者の在り方が家族の衣生活に与える影響は大で、全体（403名）の半数近い46.7%が、設問に対し「はい」としている。これを年齢層別にみると、30代が54.4%で影響力が最も大きく、次いで10・20代、40代、50・60代の順である。（図1）

この結果は有意差が認められ、半数近い世帯の衣生活の実態は家計担当者の考え方の影響が大きいと思われる。

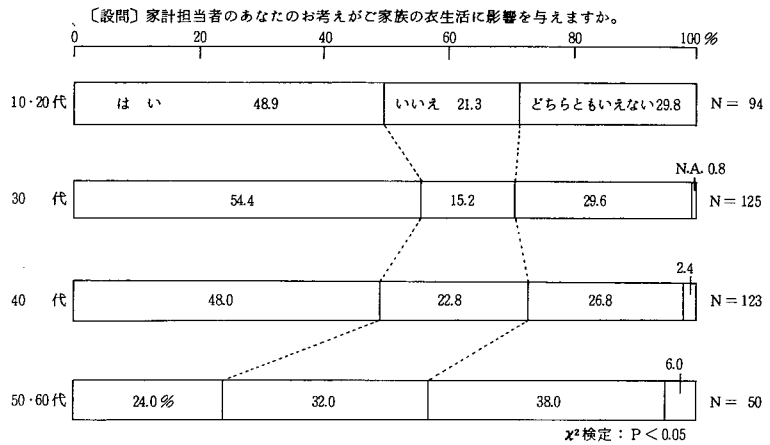


図1. 家族の衣生活に対する家計担当者の影響率

(2) 購入時の計画性

被服類の買い方について「一年間あるいは、シーズン毎の大体の計画をたて、無駄のない買い方を心がけている」とする者は、全体の37.5%、「衝動買いが多い」とする者は41.9%、「その他」が17.6%で、これは計画的買い方と衝動買いのいずれもが該当するものと思われ、衝動買い、無答を除く55.1%の者は、できるだけ計画的買い方を心掛けており、健全な衣生活がうかがわれる。

これを家計担当者の職業の有無別にみると、図2に示すように

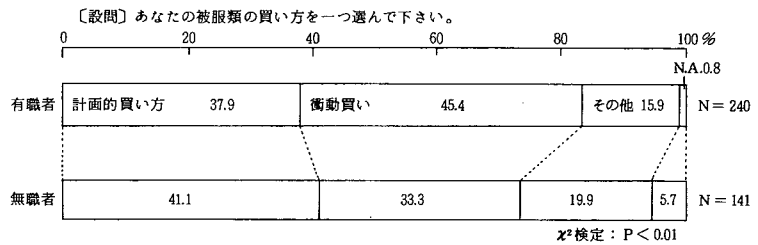


図2. 被服類の買い方

に計画性があるのは職業を持たない家計担当者の方で、その差3.2%ではあるが、有職者より率が高くなっている。逆に衝動買いが目立つのは、有職者の方で、無職の者との差が12.1%と大きく、統計的有意差も認められる。

(3) 購買時の選択基準

家計担当者全体が選んだ、被服類を購入する際の選択基準を高率な項目よりあげると「デザイン」33.7%、「色・柄」17.1%、「材質」15.6%、「サイズ」14.7%、「価格」14.0%、「仕立て」2.2%、「耐久性」1.5%である。「デザイン・色柄」という被服の外観効果を1位にあげる者が、50.8%と過半数を占める。さらに購入時重視する理由で最も考慮するのは、「着心地のよさ」で、全体の54.8%を占めている。次いで「手入れが簡単」13.6%、「オリジナルである」7.2%、「品質表示がついている」6.9%、「ブランド製品である」6.2%、「流行品である」6.0%、「新種新製品である」1.5%となる。

これを家計担当者の職業の有無別にみると、表4、表5に示すとおりで、この結果は共に有意差が認められる。共通して支持されるのは、「デザイン・色柄」という嗜好性要因で有職者が54.8%、無職の者が44.2%である。両者の差は10.6%で有職者の方が被服類の外観効果を重視する傾向がみられる。さらに共通して高率であるのは「着心地のよさ」で、ともに過半数の選択率である。「着心地のよさ」を具体的にみると「サイズが合う」、「品質表示がついていること」などを重視しており、これら機能性・実用性にかかわる項目は、職業を持たない者の方が高

表4. 職業の有無別被服類の購入評価要因 (その1)

〔設問〕被服類を購入する際、何を最も重視しますか。一つ選んで下さい。 実数(%)

職業	色・柄	材質	価格	デザイン	サイズ	仕立て	耐久性	計
有	44 (18.4)	41 (17.2)	28 (11.7)	87 (36.4)	28 (11.7)	6 (2.5)	5 (2.1)	239 (100.0)
無	19 (13.8)	17 (12.3)	25 (18.1)	42 (30.4)	31 (22.5)	3 (2.2)	1 (0.7)	138 (100.0)
計	63 (16.7)	58 (15.4)	53 (14.1)	129 (34.2)	59 (15.6)	9 (2.4)	6 (1.6)	377 (100.0)

χ^2 検定: P < 0.05

出日本経済新聞社企画調査部、繊維二次製品銘柄調査 (1981年6月) に基づいて作成

率で、その差はそれぞれ10.8%、6.5%となる。「価格」については、意外に選択率は低く、全体で14.1%であるが、これを両者比較すると、6.4%

の差で職業を持たない者の方が経済性要因を評価している。次いで注目すべき点は「流行品である」、「オリジナルである」、「ブランド製品

表5. 職業の有無別被服類の購入評価要因 (その2)

〔設問〕さらに重視する理由を次の中から一つ選んで下さい。 実数(%)

職業	選 択 肢								計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
有	19 (8.0)	20 (8.4)	130 (54.9)	16 (6.8)	27 (11.4)	6 (2.5)	12 (5.1)	7 (3.0)	237 (100.0)
無	5 (3.6)	7 (5.1)	76 (55.1)	7 (5.1)	27 (19.6)	0 (0.0)	16 (11.6)	0 (0.0)	138 (100.0)
計	24 (6.4)	27 (7.2)	206 (54.9)	23 (6.1)	54 (14.4)	6 (1.6)	28 (7.5)	7 (1.9)	375 (100.0)

χ^2 検定: P < 0.01

〔選択肢〕 ①流行品である ②オリジナルである ③着心地のよさ ④ブランド製品である ⑤手入れが簡単 ⑥新種・新製品である ⑦品質表示がついていること ⑧その他

出日本経済新聞社企画調査部、繊維二次製品銘柄調査 (1981年6月) に基づいて作成

である」などの項目で、僅かではあるが、有職者の方が率が高く、両者の選択動機に差が認められる。しかし、いずれも商品購入動機としては、全体よりみれば低率である。

次に年齢によって差が認められるであろうか。その結果を表6、表7に示す。「デザイン・色柄」については、10・20代が最も高率で、40代、30代、50・60代と続く。その内容をみると、10・20代、30代は色柄よりデザインを重視するのに対し、40代、50・60代では色柄の方にも重点をおいている。「材質」など実用性にこだわるのは、50・60代、40代、30代、10・20代の順で、「手入れが簡単」な物を重視するのは、10・20代、30代にみられる。経済性要因については、30代が最も重視しており、

表6. 年齢層別被服類の購入評価要因 (その1)

実数(%)

年齢層	色・柄	材質	価格	デザイン	サイズ	仕立て	耐久性	計
10・20代	16 (17.4)	10 (10.9)	10 (10.9)	38 (41.3)	13 (14.1)	3 (3.3)	2 (2.2)	92 (100.0)
30代	14 (11.2)	19 (15.2)	23 (18.4)	48 (38.4)	18 (14.4)	1 (0.8)	2 (1.6)	125 (100.0)
40代	27 (22.1)	20 (16.4)	17 (13.9)	35 (28.7)	19 (15.6)	4 (3.3)	0 (0.0)	122 (100.0)
50・60代	11 (22.9)	12 (25.0)	5 (10.4)	11 (22.9)	7 (14.6)	1 (2.1)	1 (2.1)	48 (100.0)
計	68 (17.6)	61 (15.8)	55 (14.2)	132 (34.1)	57 (14.7)	9 (2.3)	5 (1.3)	387 (100.0)

出設問は表4と同じ

χ^2 検定: 有意差なし

40代、10・20代、
50・60代となる。

表7. 年齢層別被服類の購入評価要因（その2）

実数（％）

ファッション性に
かかわる項目で
は、「オリジナル
である」ことに30
代が最も関心を示
しており、「流行
品である」を最重
視する者は50・60
代では皆無である。

選択理由 年齢層	選 択 肢								計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
10・20代	4(4.4)	5(5.5)	52(57.1)	4(4.4)	18(19.8)	2(2.2)	5(5.5)	1(1.1)	91(100.0)
30代	8(6.4)	15(12.0)	61(48.8)	7(5.6)	20(16.0)	3(2.4)	7(5.6)	4(3.2)	125(100.0)
40代	8(6.7)	7(5.8)	74(61.7)	11(9.2)	9(7.5)	1(0.8)	10(8.3)	0(0.0)	120(100.0)
50・60代	0(0.0)	2(4.2)	31(64.6)	3(6.3)	5(10.4)	0(0.0)	6(12.5)	1(2.1)	48(100.0)
計	20(5.2)	29(7.6)	218(56.8)	25(6.5)	52(13.5)	6(1.6)	28(7.3)	6(1.6)	384(100.0)

注)設問、選択肢は表5と同じ

χ²検定：有意差なし

年齢層別により以上のような一応の傾向がみられるが、全体に有意な差は認められない。今後の課題として、さらに調査対象者数を多くし、年代別による傾向を明確にしたいと考えている。

4 被服に対する態度

(1) 新ファッションの採用時期

購入時の選択基準に「流行品である」ことは、あまり重要視されなかった。そこで流行の衣料に対する関心はどの程度かを知るため、その採用時期について職業の有無別に、表8に示す。

表8. 職業の有無別新ファッション採用時期

〔設問〕新しいファッションの採用に関して、あなたは次に示すどの項目にあてはまりますか。該当する番号を一つ選んで下さい。
実数（％）

採用時期 職業	選 択 肢						計
	①	②	③	④	⑤	⑥	
有	19(7.9)	69(28.8)	41(17.1)	32(13.3)	75(31.3)	4(1.7)	240(100.0)
無	9(6.4)	23(16.8)	19(13.5)	38(27.0)	44(31.2)	8(5.7)	141(100.0)
計	28(7.3)	92(24.1)	60(15.7)	70(18.4)	119(31.2)	12(3.1)	381(100.0)

χ²検定：P<0.01

〔選択肢〕 ①誰も着ていないときに真っ先に採用する ②チラホラ着ている人を見かけるようになってから採用する ③まわりの多くの人が採用するより少し前に採用する ④まわりの多くの人が採用するようになってから採用する ⑤新しいファッションをほとんど採用しない ⑥その他

選択肢①、②をあげる流行の初期採用者は、有職者36.7%、

無職の者22.7%で、その差14.0%となり採用時期の早い者は有職者に多い。選択肢③、④を選んだ流行の中期採用者は、30.4%、30.5%とほぼ同率で、流行の中期採用追随型といわれる人達である。選択肢⑤を選んだ流行無関心型も31.3%、31.2%とほぼ同率を示す。両者を比較すれば、有職者の方が流行志向傾向が強く、ことに初期採用者において、その傾向が著しい。以上の結果は有意な差が認められる。

また、全体では65.5%の者が初期あるいは中期に流行を採り入れるとしており、流行への関心は多分にみられる。年代別による流行採用時期には、有意差がみられなかったので省略する。

(2) 被服観

家計担当者の職業の有無別に被服観をとらえると、表9に示すとおりである。有職者の方が選択率が高く両者の差がみられるのは「被服とは生活を楽しく豊かにしてくれるものである」とするのが、その差18.4%、「被服とは自分の気持ち、個性を自由に表現する働きをもつものである」とするのが、その差

5.0%、「被服とは自分の美しさを引き出してくれるものである」とするものが、その差4.6%である。それに対し無職の者の方が選択率が高い項目は「被服とは身体を保護し活動しやすくしてくれるものである」で、その差14.8%、また

表9. 職業の有無別被服観

[設問] 被服に対して次の各項目についてあなたの意見に最も近いと思われる番号を一つ選んで下さい。 実数(%)

被服観 職業	選 択 肢									計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
有	85(35.4)	29(12.1)	37(15.4)	31(12.9)	23(9.6)	4(1.7)	29(12.1)	1(0.4)	1(0.4)	240(100.0)
無	24(17.0)	18(12.8)	35(24.8)	39(27.7)	7(5.0)	2(1.4)	10(7.1)	0(0.0)	6(4.3)	141(100.0)
計	109(28.6)	47(12.3)	72(18.9)	70(18.4)	30(7.9)	6(1.6)	39(10.2)	1(0.3)	7(1.8)	381(100.0)

χ^2 検定: $P < 0.001$

- [選択肢] ①被服とは生活を楽しく豊かにしてくれるものである
 ②被服そのものを最大限に利用して、あまり費用をかけることは重視しない
 ③被服とは身だしなみや儀礼として他人と円滑な関係を保つのに役立つものである
 ④被服とは身体を保護し活動しやすくしてくれるものである
 ⑤被服とは自分の美しさを引き出してくれるものである
 ⑥被服とは社会や自分の属する集団に、仲間として認めてもらうためのものである
 ⑦被服とは自分の気持ち、個性を自由に表現する働きをもつものである
 ⑧被服とは自分の地位や経済的豊かさを表現してくれるものである
 ⑨その他, N.A.

注)日本繊維機械学会被服心理学研究分科会資料に基づいて作成

「被服とは身だしなみや儀礼として他人と円滑な関係を保つのに役立つものである」とする者も同様で、その差9.4%である。職業の有無により有意差がみられる。

この結果より有職者は、被服の快適性および装身性を、職業を持たない者は、被服の保健性および適応性を評価観点とする傾向がみられる。

被服観を年齢層別に集計し、また項目別検定も試みたが年代差による有意な傾向はみられない。一応各年代が最も多く選んだ被服観をあげると、各年代とも「被服とは生活を楽しく豊かにしてくれるものである」としている。次に多く選んだのは、10・20代、30代が「被服とは自分の気持ち、個性を自由に表現する働きをもつものである」とするのに対し40代、50・60代が「被服とは身だしなみや儀礼として他人と円滑な関係を保つのに役立つものである」としている。被服に対する態度に世代を通して共通するものと、世代により異なるものがみられる。

(3) 被服観と流行採用経験

被服観が流行採用経験にどのようにかかわるかを調べた集計値を表10に示す。その結果有意差が認められ、被服観により流行の採用に影響をおよぼすと思われる。

表10. 被服観と流行採用経験

[流行の採用に] 被服を購入するとき流行をどの程度とりいれますか。
 [についての設問] 該当する番号を一つ選んで下さい。 実数(%)

採用経験 被服観	選 択 肢					計	
	①	②	③	④	⑤		
選	①	4(3.4)	45(37.8)	48(40.3)	14(11.8)	8(6.7)	119(100.0)
	②	0(0.0)	5(10.0)	17(34.0)	17(34.0)	11(22.0)	50(100.0)
	③	5(6.8)	23(31.5)	23(31.5)	17(23.3)	5(6.8)	73(100.0)
折	④	0(0.0)	20(27.8)	26(36.1)	15(20.8)	11(15.3)	72(100.0)
	⑤	5(15.6)	12(37.5)	12(37.5)	3(9.4)	0(0.0)	32(100.0)
	⑥	0(0.0)	3(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(50.0)	6(100.0)
肢	⑦	3(7.3)	14(34.1)	19(46.3)	2(4.9)	3(34.1)	41(100.0)
	⑧	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
計		17(4.3)	122(31.0)	146(37.1)	68(17.3)	41(10.4)	394(100.0)

χ^2 検定: $P < 0.001$

- [流行の採用に] ①いつも流行の被服を購入している
 [についての選択肢] ②ときどき流行の被服を購入している
 ③どちらともいえない
 ④あまり流行の被服を購入したことがない
 ⑤ほとんど流行の被服は購入しない

注)被服観の選択肢は表9と同じ

被服観①③④における選択率が全体の65.5%を占め、被服観①をもつ者の41.2%が「いつもあるいはときどき流行の被服を購入している」とし、反対に「あまりあるいはほとんど流行の被服は購入しない」とするのは18.5%である。被服の装身性を評価する者の内、流行に関心を示さない率は、18.5%で、残り81.5%の者は多少の関心を示しており、流行の採用経験をもつとみなされる。同じく被服観③をもつ者の内、30.1%、被服観④をもつ者の内、36.1%が流行に関心を示さない率である。このことから被服観①の被服の装身性を評価する者の方が、被服観③、④の被服の保健性を評価する者より流行に関心を示すことがみられる。

5 被服の廃棄とその理由

着用しなくなることも含んでの廃棄理由を職業の有無別に表11に示す。それによると、両者とも廃棄の最大理由は、「すり切れ・汚れ・色あせなど」で、有職者31.9%、無職の者33.6%の率である。両者の差がみられる項目の内、「流行遅れ」と「着あきた」では、有職者の選択率が高く、その差は6.9%および5.7%である。それに対し無職の者の選択率が高いのは「サイズが合わなくなった」という理由で、その差13.5%である。職業の有無による有意な差が認められる。

さらに年齢層別に廃棄理由をとらえると表12に示すとおりである。有意な差は認められない

ものの、一応の傾向はみられる。「すり切れ・汚れ・色あせなど」による理由は、30代が最も率が高く、「サイズが合わなくなった」という理由は50・60代、続いて40代、「流行遅れ」では10・20代がそれぞれ高率である。

6 現在の衣生活に対する満足度

現在の衣生活に対して「別に不満はない」とする者は、全体の24.1%にすぎず、他は何らかの不満を感じている。その主たる理由は「価格が高すぎる」、「自分の好みの商品が少ない」となっており、必ずしも満足し充実した衣生活と感じている者は少ない傾向にある。

表11. 職業の有無別被服の廃棄理由

〔設問〕あなたが衣服類を着用しなくなる理由を次から一つ選んで下さい。 実数(%)

職業	選 択 肢						計
	①	②	③	④	⑤	⑥	
有	74(31.9)	47(20.3)	34(14.7)	50(21.6)	26(11.2)	1(0.4)	232(100.0)
無	45(33.6)	18(13.4)	12(9.0)	47(35.1)	11(8.2)	1(0.7)	134(100.0)
計	119(32.5)	65(17.8)	46(12.6)	97(26.5)	37(10.1)	2(0.5)	366(100.0)

χ²検定：P<0.05

〔選択肢〕 ①すり切れ、汚れ、色あせなど ②流行遅れ
 ③着あきた ④サイズが合わなくなった
 ⑤似合わなくなった ⑥その他

表12. 年齢層別被服の廃棄理由

実数(%)

年齢層	選 択 肢						計
	①	②	③	④	⑤	⑥	
10・20代	28(30.8)	20(22.0)	9(9.9)	21(23.1)	13(14.3)	0(0.0)	91(100.0)
30代	48(39.3)	18(14.8)	14(11.5)	26(21.3)	15(12.3)	1(0.8)	122(100.0)
40代	34(29.6)	18(15.7)	18(15.7)	36(31.3)	9(7.8)	0(0.0)	115(100.0)
50・60代	17(34.7)	6(12.2)	4(8.2)	16(32.7)	5(10.2)	1(2.0)	49(100.0)
計	127(33.7)	62(16.4)	45(11.9)	99(26.3)	42(11.1)	2(0.5)	377(100.0)

〔設問〕、選択肢は表11と同じ

χ²検定：有意差なし

前述の設問の結果とあわせて考察すると、過半数の者が「購入時出来るだけ計画的買い方を心がけている」としているにもかかわらず、不満の主たる理由として「価格が高すぎる」としており、衣生活における家計担当者の配慮の困難さがうかがえる。しかし購入時の選択基準として「価格はあまり重要視されていない」という結果もみられる。このことより消費者にとって、商品が「安い」ということが購入を促進させる条件であることは事実であるものの、「自分の嗜好に合うものが優先される」という傾向もみられる。

不満とする理由の中には「自分の好みの商品が少ない」ということもあげられており、現段階では市場に出回る被服類の中から、消費者各自が望む条件の組み合わせられた選択基準に適合するものを選ぶことは、必ずしも容易でないことがうかがえる。消費者側からは、今後の衣生活の歩みには、一般性ととも特殊性の生かされた衣料の出現がのぞまれるところであろう。

要 約

岡山県南地域の家計担当者を対象とし、衣生活の実態把握を目的に調査した結果を要約すると、次のとおりである。

- 1 家計担当者が衣料の最多消費者である世帯が最も多く、次いで子供、夫の順となっている。
- 2 家計担当者の在り方が家族の衣生活に与える影響は大き、30代が最も影響力が大きく、次いで10・20代、40代、50・60代の順である。
- 3 購買時の選択基準では「デザイン・色柄」などの嗜好性要因が最も重視され、職業を持つ家計担当者にこの傾向が顕著であり、また10・20代の年齢層にも支持される要因となっている。

職業を持たない家計担当者では「着心地のよさ」などの実用性要因を最重視しており、年齢では、高齢になるほど選択率の高い要因となっている。

- 4 流行の初期採用者には有職者が多く、無職の者より流行に対する志向傾向の強さを示している。年齢により志向傾向に有意な差は認められない。
- 5 被服観については、有職者は被服の快適性および装身性を、職業を持たない者は被服の保健性および適応性を評価する傾向がみられる。年齢により有意な差は認められないが、被服に対してとる態度に世代を通して共通する考え方と世代により異なる考え方がみられる。
- 6 流行の採用に関しては、被服の装身性を評価する者の方が、被服の保健性を評価する者より流行に関心を示している。
- 7 被服類についての廃棄の最大理由は「すり切れ、汚れ、色あせなど」となっている。家計担当者の職業の有無により差がみられるのは、「流行遅れ」、「着あきた」という廃棄理由では、有職者の選択率が高くなっており、「サイズが合わなくなった」という理由の選択率は、職業を持たない者の方が高くなっている。年代により廃棄理由に有意な差は認められない。
- 8 現在の衣生活に対する不満をあげる者は多く、必ずしも満足し充実した衣生活であると感じている者は少ない傾向である。

岡山市を中心とした岡山県南地域の衣生活実態を調査した結果、概容を知ることはできたが、年齢層別による影響を明確にすることができなかった。今回の調査の反省にもとづいて、これを今後の課題として調査研究を続けて行いたいと思っている。

稿を終えるにあたり、本研究に際し、御指導いただきました岡山大学深田貞子教授に深く感謝の意を表します。

〈付記〉 本研究は、第32回日本家政学会中国・四国支部研究発表会（昭和60年10月13日）において口頭発表した。

参 考 文 献

- (1) 総務庁統計局 家計調査年報（昭和50年～59年） 1976～1985
- (2) 日本繊維機械学会被服学体系化分科会 被服科学総論（上巻・下巻） 1981
- (3) 日本繊維製品消費科学会 繊維製品消費科学ハンドブック 光生館 1975
- (4) 深田貞子著 家族経済論 ドメス出版 1985
- (4) 深田貞子 家計における消費行動の変化について 岡山大学教育学部研究集録第63号 1983
- (5) 藤原康晴 被服心理学の概要 被服行動を規定する要因とその測定実習 日本繊維機械学会 1982
- (6) 中川早苗 被服と流行 被服行動を規定する要因とその測定実習 日本繊維機械学会 1985
- (7) 林 英夫 嗜好と被服行動 被服行動を規定する要因とその測定実習 日本繊維機械学会 1981